

日中狐文化の探索

坂井田ひとみ

(1)

狐は、言うまでもなく哺乳類犬科に属する動物である。狐をただ一種の動物として見るのであれば、毛皮が利用できるとは、実際には極々平凡なものである。

狐は、象のように大きく立派な体を持っている訳ではない。性格は虎やライオンのように猛猛しくもなく、オオカミやヤマイヌのように凶悪でもない。キバノロやキョンのようなおとなしさはないが、蛇やサソリのような毒はない。また、パンダのような珍奇な存在でもない。

ところが、日本の説話、伝承、民話の中に、狐が多く登場し、また稲荷神の使いなどと言われ靈獣扱いもされている。物語の中では、狐が人間に化け、人を騙したり、また人間の男と結婚し子供をもうけたり、さらには人間のために働いたり、人間に恩を返したり、その逆で恨みを返したりと、妖怪的、神秘的、奸狡的なイメージを持って登場す

る。狐はわれわれ日本人にとって、魅力的なものであると同時に、魔性のものとして忌み嫌われるものという、互いに矛盾するような狐観をもたらしている。

日本においては、人と狐が密接に関わって暮らしてきた。魔性としての狐を、一方では田の神の使いとして信仰の対象としている。この狐に対する二面性は、日本における狐観を特徴付けるものであるが、これはどこからもたらされたものであろうか。

日本における文化、学問は、中国からの移入によるものが多くを占めると言われるが、この狐に関する説話、伝承はどのようなであろうか。ここでは、日本・中国の狐に関する文献を比較しながら、日中における狐の特質、特異性などから日中の狐文化を探索してみたい。

(2)

漢・戴聖《礼記》^①檀弓上・第三には、「古之人有言、曰、狐死正丘首、仁也。正丘首正首丘也。仁恩也。」（古人曰く、狐は死するとき、正しく丘に首するは、仁なりと、「正丘首は正首丘なり。仁は恩なり」）、という記載があり、狐が死ぬときは、自分の住んでいた丘を向いて死ぬので、これは正に仁であるとして狐を讃えている。

《山海経》^②卷一南山経に、「有獸焉、其状如狐而九尾、其音如嬰兒、能食人、食者不蠱。」とある。つまり、狐のようなかたちをした九つの尾がある獣がいる。声は嬰兒のようで、人を食う。この狐の肉を食べると魔除けになると言うのである。

後漢・班固《白虎通義》^③に、「狐死首邱、不忘本也、九德至、則九尾能得其所、子孫繁息、于尾、明后当盛也。」と

あり、ここでは九尾狐は、子孫繁栄を象徴している。

上古の狐は、漢代の石刻画にもあるように、龍、鳳凰、麒麟などと同じように吉祥の生き物に属し、瑞祥の象徴、靈性を合わせ持った高い徳のある靈獣と見做されている。

秦・呂不韋《呂氏春秋》⁽⁴⁾卷四「音初」に、禹は塗山で塗山氏の女を見掛け一目で気に入る。女も禹に愛情を抱く。しかし禹は治水で南方へ行き、いつまで経っても帰らない。そこで、「候人兮猗」（人を候つこと猗きかな）の歌を作り、禹との相愛の情を表した。

漢・趙曄《吳越春秋》⁽⁵⁾卷四に、禹は三十歳で独身、結婚を考えていた。塗山で九尾狐を見て、「綏綏白狐，九尾隴隴。我家嘉夷，来賓爲王。成家成室，造我彼昌。天人之際，於茲則行。」（九尾の白狐を見た人は国王になり、塗山の娘を娶った人は家が栄える。）という民謡を思い出し、その塗山の娘・九尾狐を娶る、とある。

これらからも分かるように、九尾狐は神聖なる、瑞祥の象徴とされていたことが分かる。

ここで、「九尾狐」の尾がなぜ九本なのかであるが、中国では「九」という数字は最高のものとされている。《易・乾》⁽⁶⁾に、「文言」乾元用九，天下治也。（乾元が九を用いて、天下を治める。）とある。他にも、「九頭鳥」という伝説上の九つの頭を持つ怪鳥がいる。「九華」とは、宮室や器物の美しい飾りのことを言い、「九章」とは、天子の服装に用いる九種類の模様のことを言う。「九賓」は、天子が賓客として大切に扱ってなす九種の人を指し、「九天」は、天空の一番高いところを言う。これらのように「九」は、極数でこれ以上の数はないところから、一般に幸運を表し、また、「九」は三の三倍で、天界、地界、冥界の三つの世界を支配する完全な力を意味するところから、歴代の皇帝も好んで「九」を用いたことは広く知られるところである。

つまり、吉祥を表す「九」と狐が結びつけられ、九尾狐が瑞祥の象徴となったと思われるが、それではなぜ狐が瑞

祥とされるのであろうか。

漢・許慎《説文解字》⁽⁷⁾の「狐」の項に、「祿獸也。鬼所乘之。有三德。其色中和。小疇大後。廣韵作豊後。死則丘首。謂之三德。從犬。瓜聲。」(狐は妖獸であって、鬼(幽霊、化け物、妖怪)の乗り移るものである。三徳があり、その色は中和、前は小さく後は大きく、死ぬときは丘に首を向ける。これはすなわち三つの徳である。犬偏で瓜声に称す。)とあり、狐には三徳があると言っているのである。鬼が乗り移るとは、狐に鬼が乗り移ることを意味し、そこから狐の変化(へんげ)という考えに結び付いたとも解釈できる。ここで言われる三徳については、「他に所見なし。あるいは當時の俗説であろう。」⁽⁸⁾とするものや、頭部が小さく尻が大きい形状は、初年よりも晩年の幸福、現在より常に後の方が大切という中国人の人生観から、種族としては子孫繁栄をもって真の幸福とする瑞祥と考えられたに相違ない、⁽⁹⁾という見方もある。

狐の色について言えば、一般に「黄」色をしている。黄色は五行の土の色で、日光、大地、五穀、天子の色として尊ばれるところから徳と見做されたのではないかと思われる。また、死ぬ時に丘に首を向けるのは《礼記》に、仁義の徳という解釈がある。

〈小疇大後〉については、《説文解字》に依りながら一字一字を解釈すると、「小」には小さい、少ないの意があり、「疇」には進む、「大」には太い、後、よいなど、「後」には遅れる、遅いなどの意がある。また「後」には、《詩・大雅・瞻卬》⁽¹⁰⁾に「式救尔後」(後はすなわち子孫)とあり、子孫の意もある。日本の稲荷神社にある狐の像は頭が小さく、お尻が大きく、ひょうたん型のようなところから、「狐が瓢、瓢に通じるゆえに尊い」⁽¹¹⁾という説もあるが、中国での狐の姿は必ずしもひょうたん型とは限らない。中国では狐は、顔が小さく尾っぽが大きい形状であるが、これは日本語で言うところの「末広」、中国語で言う「大器晚成」等を意味するのではないかと思われる。つまり、物事は全て

において後が肝心で、中国の歴史上の人物を見ると、前漢・高祖（劉邦）や三国時代の蜀の劉備、または明・朱元璋（洪武帝）のように、初めは目立たず力も地位もなかったが最後には皇帝にまでなっている。つまり、人物でも富でもすぐには出来上がらず、後になって次第に出来上がってくる。いわゆる、後に栄えるのである。

《説文》での「徳」と化け物が乗り移るといふ「妖」のイメージとが結び付けられ、怪異神奇の「妖狐」としての観念が出現してきたと言えよう。

(3)

「九尾白狐」は、青邱国の生まれで、「塗山」というのは禹に瑞祥を示した青邱の九尾白狐が住むところとされるところから、先に述べた《呂氏春秋》での、「塗山氏之女」といふ言い方は「九尾白狐の娘」に他ならない。中国語では、たとえば李家の娘なら〈李家之女〉という言い方をする。したがって、「塗山氏之女」は、ここに住む九尾白狐の娘を指す。これについて、《呉越春秋》に夏禹が娶った女は、美女に化けた九尾白狐で名は女嬌、狐仙（狐のお化け）であるとの記載があり、これらからみて、《呂氏春秋》での「塗山氏之女」が狐が人間に化けた最初であると言える。

その後、狐の形態は変化し、妖怪になって悪巧みを抱く。漢・劉向《戦国策》の「虎の威をかる狐」¹²では、狐のずるさが強調され、狐が虎の威勢を借りて他の獣を脅したという話が収められている。

漢・焦延寿《焦氏易林》¹³巻十に、「老狐屈尾 東西爲鬼 病我長女、」（老狐は尾を隠し、あちこちで妖怪になって、私の長女を患わせた）、巻十二に老狐は変化（へんげ）が多く、行動は蠱怪で、私の母を驚かせ最後まで咎悔しないとあり、まさに魔物のイメージである。

漢・応劭《風俗通》⁽¹⁴⁾の中の〈郅伯夷〉には、赤髪の老狐が悪さをし、人の髪を切ったりするので、郅伯夷はそれを捕らえて殺したとあり、漢代の狐は比較的原始的で、魔性ではあるがその神通力も限られている。

《玄中記》⁽¹⁵⁾になると、狐のイメージは更に妖気を帯びる。これによると、狐五十歳能変化成婦人、百歳爲美女、爲神巫、或爲丈夫、与女人交接、能知千里外事。善蠱魅、使人迷惑失智。千歳即与天通、爲天狐、(狐は五十歳になると婦人に変身でき、百歳になると美人や神巫に、あるいは男に変身して女と交接し、千里以外の事を知る事が出来る上、人間を誑かしたり、毒害したりする。そして千歳になれば、天に通じ「天狐」になる)とある。「天狐」とは「天仙」のことで、これは狐が修練して精になり、人に変身し神通力を持って、触犯すれば必ず迫害する⁽¹⁶⁾という、狐の精霊のことである。

妖狐とか強力な魔物というような狐の姿は、すでにこのあたりから見られる。

古代における狐像には、褒貶両方あり、一般的には貶は褒より多く、《玄中記》もその一例である。

晋・葛洪《抱朴子》⁽¹⁷⁾の内篇卷三に、狐・狸・狼はすべて八百年の寿命で、満五百歳になれば人間に化けられる、とあり、狐のこのような変化(へんげ)に加え、魏・晋・南北朝になると狐の妖術が加わり、法力も無限となり、次第に完璧な人間の形を獲得できるようになり、人間としての感情や知力を持つようになる。

晋・干宝《搜神記》⁽¹⁸⁾卷十八〈宋大賢殺鬼〉での狐も、鬼に化けて人間に悪巧みを抱く。同じく卷十八「張華擒狐魅」では、

千年の劫を経たまだらの老狐が、書生に変身し、張華という名の高官のところへ知恵比べに行こうとする。これを聞いた樹齡千年の華表の木は、狐に止めるように忠告したが狐は行ってしまった。狐の変化(へんげ)を見破った張華は樹齡千年の木を燃やし、狐を煮殺した。千年を経た狐は、千年を経た古木で照らせば正体を現すという

言い伝えがあったからである。(要約)

また同卷〈山魅阿紫〉では、《名山記》を引用して、「狐というのは、上古での淫婦である。その名を阿紫と言ひ、それが狐に化けた。その怪物は阿紫と自称した。」とある。つまり、紫という名の人間の淫婦が狐になって、男を誘惑するといふのであるが、ここでは逆に人が狐になったといふ発想があり、人が狐に化けるのか、狐が人に化けるのか、いずれにしても「化ける」といふ觀念はすでに確固たるものになっている。

晋・葛洪《西京雜記》¹⁹の〈樂書墓中白狐〉では、

王去疾と少年たちが、墓荒らしをしようと墓を暴くと、そこに一匹の白狐がいた。彼らはこれを捕まえようとして逃げられたが、狐の左足を負傷させた。その後、王の夢にこの狐が出てきて「何の罪もない私の左足をなぜ負傷させたのだ」と言ひ、王の左足を杖で打った。夢から醒めた王は、左足に大きなでき物があるのを発見するが、痛くて治らず、とうとう死んでしまった。(要約)

ここにおける狐は、自分を傷つけた人間への仕返しに、自分と同じように負傷させ、そして死に至らしめている。狐の報復譚であるが、これを見ると狐も相当恨み深いようである。

物語の中の狐は、ある時は美女に、ある時は少年、白髪の老人などに化けて、人間世界に混入し、色々な役柄を演じる。物語の筋は形式的に成りがちで、大抵は狐精が出て来て活躍するが、最後には原形を現し、逃げるか殺されるかであった。その形象は頗る悪く人情味にも欠けている。この時代の妖狐物語の中では、狐は神通力を持ってはいるが、それには弱点があり、犬を見ると恐れおののき、その原形を現してしまう。また、狐の体臭は極めて臭く、また変身しても必ず尾が残ってしまい、一旦人に見破られると、たちまち狼狽して逃げてしまうのである。

魏・楊銜之《洛陽伽藍記》²⁰に、

挽歌者の孫嚴は、妻を娶って三年になる。妻はいつも服を脱がないで寝る。嚴は不思議に思い、妻が寝たのを見計らって、服をそっと脱がせてみた。すると三尺程の尾があり、それは狐の尾に似ていた。嚴は恐ろしくなって離縁した。妻は家を出る時、嚴の髪の毛を切り取って行き、それ以後も都で人々の髪を切ったと言う。(要約)

ここで言う挽歌者は、当時葬式をする時に、挽歌を歌うのを仕事とした人で、「挽歌郎」とも呼ばれるが、これらの人は常に死人を相手にしているので、妻まで妖狐になってしまったとでも言うのだろうか。いずれにしても、これに相似の物語は、魏晋小説中によく見られる。

(4)

唐代になると、妖狐小説にも新たな趣が加わり、狐が神に昇格する話が登場してくる。

唐・張鷟の《朝野僉載》⁽²¹⁾の中に、「唐初以来、百姓多事狐神、房中祭祀以乞恩、食飲与人同。」(唐初以来、民間ではほとんど狐神を祭る。部屋の中に祭って恩恵を乞う。飲食は人間と共にする。)、また諺では、「無狐魅、不成村」(狐の化け物がいなければ、村にならない。)"と云うとある。

《史記》⁽²²⁾の《陳涉世家第十八》には、狐を神として祠に鎮座させたという、その神の狐を利用して王者になろうとした話が見られる。また、宋代には民間に「狐王廟」があったという。

狐に対しての幻化、神化を経て、ついには崇拜にまで及び、民間では狐を祭り、吉凶を占い、疫病を治し、禍を取り除いたと言う。さらには役所、宮廷にまでこの風習が入り、印を守る狐、宮を守る狐があった。一見、愚考と思われる狐の崇拜は、当時の中国文化の重要な構成部分であったのである。その中の深厚な文化や世風人情、美醜善悪な

どは中国人の理想とする所であったに違いない。そればかりでなく、これらが唐代における狐精物語の繁栄を物語っているとも言えるのである。

宋代初年に編纂された《太平広記》²³は、漢から五代に至る伝説、奇聞を分類集成した説話集で全五百卷、その中に狐精物語は九卷あり、その数全部で七十二篇に上る。唐以前及び唐代の狐精物語をすべて網羅したとは言えないが、それでも現存の小説数から見ても、違漏は少ないと見てよいだろう。七十二篇中、六分の五は唐人の作である。唐以前の狐精物語は僅か十二篇で、しかもそれらは短編のものばかりで、内容も簡単であり、唐代のものとは比べると質も劣る。唐代において狐精物語は質・量ともに全盛を迎えるのである。言い換えれば、狐精物語の芸術的基礎は、漢代において出来上がり、唐代において成熟したと言える。狐の芸術世界は、狐を人間化、理想化したところにある。各時代において数少なからぬ作品は、狐を狡猾で、人を誑かすといった性悪の獣として描いているが、しかし、圧倒的優勢なのは、狐の美と善の面である。それは時代とともにその数も増え、描写においても細かく深みがあり、その上人に感動を与える。狐の多芸多才や愛情などをはっきりと書き分け、悪を懲罰し善を讃え、人類と友好的に付き合う友としての狐の姿が描き出されている。

これについて魯迅は、唐人は初めて意識して狐を小説にした²⁴、と述べており、まさに狐の妖怪変化（へんげ）の芸術的成熟は、唐代伝奇小説の発展と同進暢と言え、これは「志怪」と「伝奇」の結合と言え。

唐代早期の伝奇小説である、王度《古鏡記》²⁵は、古鏡の示す異変について列記されているが、その冒頭に女狐精のことが述べられている。

師から古い鏡を貰った御史の職にある男は、旅の途中、ある宿屋に泊まる。その女中は大変な美人で名を鸚鵡と言ひ、千年を経た狐の化身であった。鸚鵡は、男の持っていた天の鏡で照らされ、もはや逃れるすべがなく、

正体を現してしまう。鸚鵡が正直に身の上を明かすと男は彼女を許してやる。そしてその夜、鸚鵡は心ゆくまで酔い、歌を歌い、二度お辞儀をして、老狐の姿となって死んでしまった。(要約)

この狐精の形象には、六朝志怪の風格がある程度は残っているが、しかし六朝志怪中の狐精に比べると、はっきりとその違いが読み取れる。まず彼女の人生経歴や感受性が豊富な点である。これは当時の下層階級婦人の人世を写し出しており、その代弁者と成り得ている。このような狐精物語は、唐以前にはなかったところである。この鸚鵡は、神奇の古鏡に出会うまでは、随分と人を化かして思う存分悪事を働いて来たのだが、最後に至っては、その逆境の中おとなしく人間に従い、神の権力に恐れをなしている。作者がこのような狐精の性格を特徴付けたところに、はっきりとした進歩が見て取れる。それまでの聞き書きの「志怪」から一步抜き出て、作者の手によって作り出されたストーリーもプロットもあるやや長い物語、つまり「伝奇」へと昇格したのである。

唐・載孚《広異記》²⁶には、三十二篇の狐精物語が収録されているが、これは現存する唐代狐物語の半分を占める数である。ここに収められている狐物語は、六朝文学の「志怪」から唐代文学の「伝奇」に移行する過渡期に当たり、狐物語の発展変化を象徴するものとなっている。《同書》の《天狐》は、

ある知事が出家したいと言いだし、読経すること一ヶ月、彼の前に菩薩が現れ、仏道の尊さを述べ飛び去った。それから知事は食事もせず坐禅を組んでいる。家族が心配し、道士に見てもらおうと「天狐のしわざ」だと言う。そこで護符を与えると、精神がさわやかになり、それ以後仏門修行のことは言い出さなかった。数年後、知事をやめ郷里に帰った彼の所へ、身分ありげな劉成という男が元知事の娘と縁組にやって来た。元知事は、覚えがないので断ると、家中污水が噴き出す始末で、やむなく承知し結婚させた。元知事の息子は心配になって、以前の道士を尋ねた。道士が言うには、劉は狐で、道士と狐の対決は一騎打ちになり、最後には狐が力尽きてしまった。

道士は、この狐は天狐なので殺してはならないと、書き付けを作ってやると、狐はそれを持って新羅に飛び去った。今でも新羅には劉成という神がいて土地の人々に信仰されているという。(要約)

《同書》《狐の珠》、

衆愛は、子供の頃、よく夜中に道の真ん中へ網を張って、猪や狐などを捕まえた。ある日、何かが赤い裳をつけた女に化けた。女が一匹のねずみを捕まえ食べたので、大声で怒鳴ると女はびっくりして網にかかってしまった。棒で殴っても人間の姿のままである。しかし、生きたねずみを食べるのは狐に違いないと確信し、大きな斧で切りつけると、老狐の姿になった。衆愛がこれを家に連れて帰ろうとする途中、老僧に出会い「狐の口中には媚珠というものがある。これを手に入れることができたなら、世の中の人々全部から可愛がられるようになる」と言われた。家に連れて帰って、狐がものを食べるようになった頃、老僧は口の狭いびんを土中に埋め、中に豚肉を入れた。狐は取ることができず、しばらくすると珠を吐き出して死んでしまった。この珠を衆愛の母が身に付けると夫からとても愛されるようになったという。(要約)

唐代中期に書かれた沈既濟《任氏伝》⁽²⁷⁾は、

任氏は女の姿をした狐である。韋崙は豪放な性格で、酒好きであった。いとこの婿に鄭六というやはり酒と女が好きなのがいて、韋崙とは気があっていつも一緒に遊び回っていた。鄭六は妻がいたが貧乏なので、妻の親類の所に身を寄せていた。鄭はある日、白い着物の女を見染め、女の家を招かれた。女は任氏といい、狐の化身であったが、この世のものとは思われぬほど美しかった。鄭は、任氏が狐だと承知の上で、一緒に暮らし始めた。鄭が貧乏なので、二人の面倒は韋が見た。しばらくして、鄭は武官に任ぜられ出張することになった。鄭は任氏を誘ったが、彼女は承知しない。鄭は韋に説得を頼んだ。任氏は「あなたのために犬死にする」と断っても、二人で強

引に行く事を勧める。任氏は仕方なく行くことに同意した。案の定、任氏は道中、獵犬に食い殺された。鄭は狐の姿になった任氏を手厚く埋葬し、帰って韋にすべてを打ち明けた。韋は鄭と一緒に任氏の墓を訪れ、悲しみにくれた。その後、鄭は総監使になり家も富栄え、六十五歳まで生きたという。(要約)

この《任氏伝》は、中国狐精物語伝奇化の基礎を確立したと言ってもいい作品である。冒頭に、はっきりと「任氏是一个女妖」(任氏は女の化けものである)と書かれている。狐である任氏は自ら進んで、貧苦で美男でもない鄭六と結ばれ、家計を助ける。鄭は任氏が狐であることを承知しながら、いづくしみ大切に、深い愛情を築く。鄭の友人の章崆が任氏と想いを遂げようとした時、任氏は章の権力と金銭に屈服せず、逆に道理を持って説得したため、章は諦めざるを得なかった。作品の最後で、鄭の誘いに負けて旅に同行した任氏の死が描かれているが、巻末での作者の評注に、

動物の心の美しいこと人間と少しも変わらない。惜しいのは、鄭が教養のある人間でなかったことだ。任氏の色に心を奪われ、情を重視しなかった。博学の人であったなら、きっと変化(へんげ)の道理が分かり、神と人間の関係を観察し、美しい文章として奥深い心理を表し、ただ彼女の風態を鑑賞しただけには止まらなかったであろう。(要約)

とあるように、狐の妻がその才覚を発揮して夫を助けたのにも拘らず、人間の方が見抜くことができず、結果は間接的に殺してしまった。(神と人間の関係)という言葉にも表れているように、狐の任氏を神の位置にまで高め狐の方が人間よりも上という作者の認識がある。その後、鄭六が人生での幸福を手に入れることができたのは、任氏が彼を守ったに違いない。

《任氏伝》は、狐精文学の神秘的特徴を保ちながら、さらには人間変化(へんげ)の芸術的成熟を昇華させている。

この任氏は唐代小説中、最も美しく多情多智で、人間性に富んだ狐精の形象と言える。作中の「人性」が「狐性」と「神性」を超越して、さらに人間世界に擦り寄って来ている。

(5)

日本での狐は、空海と一緒に中国から渡ってきたという記述がある。しかしそれは黄狐、玄狐ではなく、白狐だという。

空海は桓武天皇延暦二十三年（八〇四）唐に渡り、仏法の修行を終えて平城天皇大同元年（八〇六）帰朝した。

その帰国の際彼と共に白狐が密かに乗船し、両者は無事日本に上陸した。やがて彼の白狐は稲を荷える老翁に化身し、東寺の門前において空海と再会した。後に空海はこの老翁を手厚く祭って東寺の鎮守神とした、と言う説話による。⁽²⁸⁾

この白狐は、中国の伝統文化を身に付けた渡来狐で、老翁に変身して、その後は空海の手によって手厚く祭られ、鎮守神となったというのである。これは、唐に渡った空海があちこちで狐が祭られているのを見たり、また狐にまつわる伝説などを聞き、それらの話を持ち帰ったのが、このような形になって伝えられるに至ったのであろうか。

われわれ日本人と狐の付き合いも古く、すでに『万葉集』⁽²⁹⁾に歌われている。卷十六・三八二四、

さし鍋に 湯沸かせ子ども 櫛津の松橋より来む 狐に浴むさむ

これは、ある時、大勢集まって宴会をしたとき、夜の十二時頃、狐の声が聞こえたので一同が長忌寸意吉麻呂（ながのいきみおきまろ）になんなりと歌を作れと言ったのに対して、即座に作ったのがこの歌という。

『続日本記』³⁰和銅五年(七二二)の条に、「秋七月壬午(十五日)伊賀国が「瑞祥の」玄狐を献上した。(以下略)」とあり、玄狐つまり黒狐が献上されたとの記載があり、同じく九月の条に、

九月己巳(三日)(前略)朕は聞いているのだが、故老が伝えて言うには、子の年(和銅五年は子の年)は穀物の実はよく稔らない、と。しかし、天地が助けしてくれたため、今年は大いに稔った。古の賢王が言うには、「いくら瑞祥が良いといっても、豊作の年が良いことには及ばない」と。「ところが豊作である上に」さらにまた、伊賀国司阿直敬らが献じた玄狐(黒狐)は、「瑞祥の書物と照合すると」上瑞に合っている。その文にいうには「玄狐は」王者の「政」治が世の中をよく治めて平和なときに現れる」と。「朕は」万民とこの喜びをともしたいと思う。(以下略)

とあり、この年は、五穀凶作の年のはずであったのだが、伊賀の国から玄狐が献上されたため、水禍を免れ豊作の年となったので、これは瑞祥中の瑞祥であるとして大赦を行い、歓慶を分かち合っており、狐の出現を歓迎しているのである。

『日本霊異記』³¹上巻「狐を妻として子を生ましめし縁第二」に、

美濃の国大野郡の人が、妻とすべき良い女を探しに出掛けて行った。広い野原で美しい女に出会ったところ、女は馴れ馴れしくして来るので、夫婦にならないかと言うと、女は承知した。結婚して女は一人の男の子を生んだが、ちょうどその時、家で飼っている犬も子犬を生んだ。この子犬はいつも女に向かって吠える。女はおびえて夫に子犬を殺してくれと頼むが男は承知しない。ある日、女が碓屋に入るや否や、子犬が噛みつきこうとして追い掛けて吠え立てるので、女は驚き恐れ、正体を現して野干の姿になって籬の上に飛び乗った。男は「お前と私の間には子まである。私は決してお前のことは忘れない。いつも来て私と寝なさい。」と言った。だから野干のこと

をキツネ（狐―来つ寝）という。女は紅の裳裾を引いて行ってしまったが、夫は去って行く妻の姿を見て歌を詠み、二人の間にできた子を岐都禰と名付け、その姓を「狐の直」とした。これが美濃の国の狐の直等の由来である。（要約）

ここでは、狐が美人に化け、人間の男と結婚し子供までもうけたのだが、苦手とする犬によって正体がばれてしまい、子供と夫を残して去ってしまった。その後、狐の残した子は名族の祖となったのである。狐の直の由来は後に述べる信田妻の古形とも言える人狐結婚譚である。

同じく『日本霊異記』中巻「力女、力を拵べて試みし縁第四」には、狐の血を引く美濃の狐という力の強い女と、雷神の申し子である道場法師の子孫でやはり力の強い女がいた。道場法師の子孫が美濃の狐が市場で物品を強奪すると聞いて、現地に出向き船荷を餌に美濃の狐をおびきだし、鞭で打ちのめして改心させたという話が収められているが、身体の強大な狐の子孫とそれと比べると比較的矮小な道場法師の子孫の対決は雷神の血の圧倒的勝利に終わり、小が大を制したという点では小子の優越性を説いているが、雷神の血を実証した伝承説話である。また『同書』中巻「悪事を好む者、現に利鋭に誅せられて悪死の報を得し縁第四十」には、

橘の朝臣諾楽麻呂は、野望を抱き国家を覆そうと悪事を企む。諾楽麻呂の奴隷が狩りの最中、狐の子をたくさん見付けたので、その狐を捉えて木で串刺しにして狐の巢穴の入口に立てた。母狐はそれを怨んで、奴隷の母親に化けて奴隷の子を連れ出し、自分の子が串刺しにされたと同じようにした。しばらくすると諾楽麻呂も、悪事のため天皇に誅せられた。（要約）

と、狐の仇討ち、報復譚が収められている。

『延喜式』⁽³²⁾ 卷二十一治部省の瑞祥には、「九尾狐神獸也。其形赤色或曰白色。音如嬰兒。白狐岱宗之精也。玄狐神獸也。」とあり、九尾狐、白狐、玄狐が瑞獸、瑞祥として尊崇されていたことが窺える。

『倭名類聚抄』⁽³³⁾ 和名卷十八に、「狐能爲妖恠至百歳化爲女也」(狐は百歳になると女に化けられる)とある。これらは明らかに、『山海經』《玄中記》《抱朴子》などにある記載そのものの影響を受けている。

『今昔物語』⁽³⁴⁾ には、狐に関する記事がわりと多く収められている。巻第十四「為救野干死写法花人語第五」は、ある男が朱雀門前で、美女を見染めた。この美女は狐が変身したものであった。女は男の誘いに対して、「あなたの言葉に従えば、わたしの命がなくなるのは疑いのないこと」と、拒絶するが、男の強引な誘いに契りを結んでしまう。女は後世の供養を男に託し、死んでしまった。哀れに思った男は、約束通り『法華經』を書写供養し、その功德によって狐は切利天に往生することができた。(要約)

この話の出典は『法華驗記』下の二二七で、これに基づく話が『古今著聞集』二十の六八一にも見られるが、人間の男のために、自分が身代わりとなって死んでしまった妖奇的な狐の死と、狐の遺言通りに約束を果たした男の浪漫的情趣が仏教説話として語られている。

巻第二十五「春宮大進源頼光朝臣射狐語第六」は、東宮大進源頼光は、時の東宮より狐を射よとの命令を受ける。頼光は辞退したがやらざるを得ず、仕方なく逃がしてやるつもりで矢を放った。ところが、結果は曇目の矢で遠く離れた堂上の狐を射落とす難事をやってのけた、という話である。これは頼光の弓の妙技を讃えた話であるが、その対象が狐になっている。

巻第二十六「利仁將軍若時從京敦賀將行五位語第十七」は、芥川龍之介の『芋粥』の素材として有名なもので、腹一杯芋粥を食べてみたいという五位が、膨大な芋粥を目の前に出され、日頃の願いが叶ったのにも拘らず、うんざり

して食欲が起きなかったという話である。利仁が五位に芋粥の招待をしようとして敦賀に向かう途中で、走り出てきた狐を捕まえた。その狐に、敦賀の自分の家に行つて、高島あたりまで迎えに出るように言えと言って、狐を放した。狐はその夜、利仁の奥方に憑いて、利仁の言葉を伝えたため本当に迎えが来ていた、というものである。これは狐の飛脚の話としてよく知られているが、狐に何らかの能力があることや人に憑くことなどが信じられていたことを窺わせるものである。

巻第二十七 「雅道中将家在同形乳母二人語第二十九」は、狐が同形の人に化けて人を惑わし、最後に化けの皮が剥かれるというもので、また同巻、「狐変大楹木被射殺語第二十七」は、

春日の宮司中臣某の甥・中大夫が馬を見失つて捜し回っているうちに、見聞も知らぬ杉の木を発見する。不審に思つて主従ともども一矢を射立てた。案の定それは狐の化けた巨木で、翌朝、その地に老狐が射殺されていた。

(要約)

これは老狐の失敗譚であるが、妖狐の間抜けさは一種ユーモラスでもあり哀れでもある。本話は『今昔物語』においての本格的な狐の登場と見てもよい作品と言われている。

同巻 「狐変女形値播磨安高語第三十八」は、絶世の美女に変身した狐が播磨の安高に、これぞ高名な豊楽院界隅の妖狐かと怪しまれ、脅された。美女は悪臭極まる小便をひっかけ、狐の姿にもどり遁走して行った、という話である。これは狐が人を化かしそなた話で、先の狐と同じで間抜けさはユーモラスであるが、狐の体臭は極めて臭く、その放屁も悪臭という狐の生態もよく表されている。

同巻 「狐変人妻形来家語第三十九」は、これもまた狐が化け損じた話で、狐は化けの皮が剥がれたとみるや、悪臭の小便の放出して、狐の姿になって遁走した。

同巻 「狐託人被取玉乞返報恩語第四十」は、これは狐の報恩譚で、狐憑きの女から狐秘蔵の白玉を取り上げた若侍が、狐の懇願に応じてそれを返してやると、狐は侍の身辺守護を約束し、侍は狐の道案内で盗賊の難を逃れる事ができたという話である。

次に、『宇治拾遺物語』⁽³⁵⁾ 卷第三・二十「狐家に火つくる事」では、狐が矢で射られた恨みを晴らすため、人に化けて火をつけ報復した話がおさめられているが、狐の変化（へんげ）が信じられ、また霊力を持つという当時の俗信が窺える。『同書』卷第四・一「狐人に憑きてしとき食ふ事」では、狐が食へ物欲しさに人に憑いて、しとき（米の粉で作った餅）などを食べ、それを持ち帰ったという、ユーモアのある狐の霊力譚である。

『古今著聞集』⁽³⁶⁾ 卷第十七、変化第二十七の「大納言泰道、狐狩を催さんとするに、老狐夢枕に立つ事」は、大納言の家に住み付いた狐が、あまりに化けて困るので狐狩りをしようとしたところ、その狐が夢に出て許しを乞うたため取り止めにしたら、それ以後、化け物は出なくなり、家中に吉事があるような時には、必ず前もって狐が鳴いて知らせたという。

『同書』卷第二十、魚虫禽獸第三十「承平の比、狐数百頭東大寺の大仏を礼拝の事」は

承平の時、狐が数百頭、東大寺の大仏を礼拝したので、人々はこの寺に住む狐が尊像を破壊したために礼拝したのであると言った。（要約）

これは大仏の焼亡を予感し、その前に大仏を礼拝した数百頭の狐の話であるが、実際、承平四年十月十九日、雷火による東大寺西塔焼亡があり、それと狐の霊能力が結び付けられたと思われる。

『曾我物語』⁽³⁷⁾ 卷第五には、

さても、御狩の人々は、日のくるゝをも、時のうつるをもしらずして、かりけるに、馬の刻ばかりに、狐なきて、

北をさしてとびさりけり。人々これをとぐめむとて、矢筈をとりておっかけたり。君御覧ぜられ、かれらをめし返し、「秋野の狐とこそいへ、夏の野に狐なく事、不思議也。たれか候、歌よみ候へ」とおほせくだされば、祐經うけたまはりて、「まことに源太が歌には、なる神めでて、雨はれ候ぬ。……」

夜ならばこうくとこそなくべきにあさまにはしる晝狐かな

と申たりければ、君きこしめして、「神妙に申たり。まことに狐におほせて、けつけうあるべからず」とて、上野国松井田三百餘町をぞ給ける。

とあり、狐狩りの最中に狐が鳴いて走り去ったので、武蔵国の住人愛甲三郎が、狐の歌を詠んだという話が収められている。

『本朝食鑑』³⁸⁾には、狐の生態等が詳しく記載されているが、それらを箇条書にすると、

- ・ 狐が不可解で妖魅・媚惑なことは、衆人の常に識っているところである。
- ・ 凡そ昼は穴に伏せており、夜は出て窃食する。
- ・ 民間ではその鳴き声を聞いて吉凶を卜うのである。その体臭は極めて臊烈、その放屁もまた悪臭でとてもまともに顔をむけられない。もし犬を駆って逐えば、窘迫て必ず放屁する。その放屁に当たれば、人は悩み犬は迷うて近づくことが出来ない。
- ・ 人が傷寒、発狂を病み、あるいは毎にあれこれ思わすらい、心を勞して発病したり、死産の後に怪を作したり、夜に嬰兒を忤ったりする類の多くは、狐妖の所為、鬼の所乗である。
- ・ 妖怪に遭遇して惑わされても、軽浅な場合は巫祝のお禳いによって除去することが出来る。
- ・ 又、猛逸な田犬を放てば、犬は狐の気配を識って頻りに吠え、さらに噛みつこうとする。そうすると妖惑は離

れ去る。

・ 宿怨があつて人にとり憑いて去らぬ場合、その人は竟に命を奪われてしまう。あるいは狐が女に化けて人と通婚すると、その人は死ぬ。もしその人が死なぬ場合、反対に狐が死ぬという。然ども、どうしてそうなのか、理において詳らかでない。

・ 近世、我が国の術家に狐を使う者があり、「飯繩の法を修す」と呼称されている。

・ 狐は稲荷の神使であると伝えられている。

この『本朝食鑑』は、中国の明・李時珍《本草綱目》に準拠して書かれているので、これらの狐の特徴などは、ほとんどが中国のものと合致している。

(6)

「信太妻」と言えば中世の語り物、説経節の作品である。この話は、変形されて日本各地に伝承されている。その内容

安部保名に命を助けられた信太の森の狐は、娘に姿を変え、保名と契り男子を生む。母となった狐は、ある日、安部の童子と名付けられた自分の子に、正体を見破られ、

恋しくは 尋ね来て見よ 和泉なる 信太の森の うらみ葛の葉

という歌を残して去って行く。童子は成長し高名な陰陽師安部晴明となった。³⁹⁾ (要約)

人と狐との異類婚姻譚と狐が残した子がのちに高名な陰陽師になるという「始祖型」といわれる家系伝説とが結び

付いた話として知られているが、人狐婚姻譚はすでに『日本霊異記』に見られる。狐と人との間に生まれた子には特殊な能力があると考えられていたようで、その子は人間界でりっぱに育った上、名譽、地位など人生における最上の幸を手に入れている。

『日本昔話』⁽⁴⁰⁾に、

能登国の萬行の三郎兵衛という者、ある夜、便所に行って帰って来ると、部屋に自分の女房が二人いた。どちらか一人は化け物に相違ないのだがどちらも言動に寸分の違いがなく、難題をかけても双方ともすらすらと答える。そのうち一方に僅かな疑いがあったので、そっちの方を追い出した。

それから家が繁盛して男の子が二人生まれた。その子らが少し大きくなった或る日、子供らが母親に尻尾のあることを発見する。正体を見破られた母は、自分は狐であったことを告げ去って行った。それ以後毎年、その狐は稲の実る頃になると、三郎兵衛の田のまわりを「穂に出いでつっぱらめ」と唱えながら歩いた。この家の稲は、いつも実が入らないので、年貢が許された。ところがそれを狩り取って家に運ぶと、どこよりもよく実っていたので家は豊かになったという。(要約)

「狐に化かされた」という昔話はいまなお残り、饅頭と違って食べたそれは馬糞だったとか、気持ちよさそうに風呂に入っていたら、そこは肥溜だったとか、また木の葉がお金になるなど、狐のいたずらはよく知られるところであるが、これらの狐女房譚は、狐が女に化けて妻になり子供をもうけるのだが、自分の生んだ子に正体を見破られて去って行く。残された子は高名になり、あるいは家が富み栄えるという共通のパターンが見られる。

『和漢三才図会』⁽⁴¹⁾に、

狐は疑い深い性質なので、仲間と一緒に行動することができない。それで狐の字は孤に従う。常に猜疑心が強く、

まわりにじっと目を傾けて慎重に聴く。あるいは狐には媚珠があるとか、狐は百歳になると北斗を礼拝し、男や女に化けて人を惑わすとかいう。千年を経た老狐は千年を経た枯木を燃やし、それで照らし出せば正体を現す、という。また犀の角を狐穴に置いておけば、狐は帰ってこようとはしない、ともいう。思うに、わが国では狐は諸国にいる。伝えによれば狐は倉稲魂の神使であるという。人は稲荷祠を建てて狐を祭るが、そこに祭られたものは他の狐とは位が異なって高くなる。狐は化けようとするときは必ず鬮を頭に載せ、北斗を拝して人に化ける。『三才図会』に、狐は古の淫婦が化したもので名を紫という。そして『五雜俎』に、狐は人を化かすと多くは人の精気を取り、それで自己を充実させる妙薬とする。ではどうして男ばかりを化かして婦人を化かさないかといえ、狐は陰類なので陽を得てはじめて成るものだからである。だから牡狐であっても必ず女の姿になって男を惑わすのである。(要約)

この『和漢三才図会』は、中国の明・王圻『三才図会』を基にしているので、相当数が中国の見解である。鬮を頭にのせて、人に化けるといえるのは、『酉陽雜俎』前集卷之十五に、『舊説野狐名紫狐夜擊尾火出將爲恠必載鬮拜北斗鬮墮不墜則化爲人矣』(旧説に野狐を紫と名づく。夜、尾を撃ちて火を出す。まさに怪を為さんとするや必ず鬮を載き北斗を拝す。鬮墮ちざれば則ち化して人と為る。)とあるので、その影響からであろうと思われる。

また狐は牡でも女に化けるといえるのは、狐は陰なので陽を得るため、というのだが、しかし文学作品の中においては、男色を好む女よりも、女色を好む男の方がドラマになりやすく、美女に化けて男を誘惑するほうがロマンチックに描けるとも言え、そのため、美女に変身して男を誂かす話が多く生まれたと思われる。

(7)

中国の上古においては瑞祥の象徴であった狐は、魏・晋以降多くの伝説を生み、唐のあたりから神として祭られるようになったのが、それがそのまま日本に伝わったようである。

中国では、宋・元・明三代においては、狐精物語に目新しい作品は生まれず、ほとんど停滞時期であった。先に紹介した《任氏伝》が切り開いた狐精文学の新伝説は後代の狐精文学に大きな影響を与えたのではあるが、しかしその後には見るべきものはなく、多くの作品は依然として志怪の古い道に戻ってしまった。

しかしその中であって、宋・李憲民《雲齋広録》⁽⁴³⁾の《西蜀異遇》は、人々を喚起させるものがある。

書生・李達は、宋媛という娘に出会い、互いに愛し合うようになる。ある日、李達が昼寝をしていると、夢の中に李二秀才が現れ、宋媛が妖狐であることを知らせ、李達に咒符を一枚渡し、宋媛が接近できないようにした。

李達が符を持っているため妖狐は近付くことができない。しかし、宋媛は李達のことを日夜恋しくて堪らず、「蝶戀花」を一首書いて自分の思いを李達に贈った。これを読んだ李は感動し、彼女の才能と美貌にますます引かれ、「我生きるときも死すときも媛から離れず」と叫び、符を破った。二人は一緒に暮らすようになるが、李の両親は世間の中傷、噂を聞いて、二人を引き離そうとする。宋媛は、李達やその両親に真心を持って接したため、最後には両親もついに二人を許した。その後、二人の間に一人の子が生まれ、その子が一歳になろうとする時、宋媛は跪き李達にこう言った。「私達が一緒になったのは、決して偶然なんかではありません。宿縁によって、とうとうお別れする日が来ました。どうかあなたは勉強に励み、良い友を作り、祖先の名誉を築き父母に孝行し、くれ

ぐれも私のことばかり考えないでください。」と悲しみで声にならない声で、努力と自愛を望んでいると励ました。そして翌朝、妻と子はいなくなつた。折りにふれ、李達は彼女のことを思い出したが、その消息は分からなかつた。(要約)

この作品は、相手が狐であることを知りながら、その恋愛を成就させようとした人間の男と狐の愛情物語である。この種の愛は、人間と狐との別世界を超脱した高尚な愛であり、それは無私、純真なもので、人を感動させるには十分である。李達は、一切を顧みず狐を愛し、その上毅然として咒符を破り捨て、宋媛との愛を成し遂げた。

この《西蜀異遇》は、《任氏伝》の伝奇化、人間変身の特徴を受け継ぎ、それと同時に数多くの志怪性も保留していると言える。その中には、数多くの詩や詞、文が含まれており、明朝の伝奇小説に大きな影響を与え、これらの小説の突破口を開いたのである。

元・作者未詳《湖海新聞堅志》⁴⁴の《狐恋亡人》は、

陳承務は、家が貧しく嫁も貰えない。ある日、村の娘を見染めると、その娘が突然やって来て陳の妻になった。

しかし結婚後、陳は顔色も悪くなり、とうとう痩せて死んでしまった。妻は葬式をしたが、その時、村人は老狐がそばで泣いているのを見掛けた。火葬にする時、老狐は火の中に飛び込み、以後、その姿を見た者はなかつた。

(要約)

明代になると、唐代伝奇の流れの上に立って、ロマンチックで幻想的なものが見られる。

明・李昌祺《剪灯餘話》⁴⁶の《胡媚娘伝》は、

新鄭駅の使丁の黄興は、用事に出掛けた帰り、疲れて林の中で休んでいると、一匹の狐が髑髏を頭に被って月に向かつて拜んでいるのが目に入った。すると、この狐は十六、七の美しい娘に変身した。黄興は、これは珍しい

と思ひ、何とか手に入れようと、娘に声を掛けた。女は胡媚娘という名で、家族が強盗に殺されすべて奪われてしまひ、死のうとしていたと言う。黄はこれを聞いて、自分の家は貧しいけれども世話をする女房もいるからと誘った。娘は黄の家について行き、世話になることになった。ある日、黄のいとこの蕭裕が来たので、黄は金儲けを企み、蕭に媚娘を近付けさせた。蕭は媚娘の美しさに引かれて、普通の十倍の金を黄に支払って妾にした。媚娘は聡明でやさしく、誰からも好かれた。蕭が出張の折り、道教の寺に泊まると、その道士が「妖気がただよっている。治さぬと命に関わりませぬ。」と言った。蕭はでたらめと気にも止めなかったが、晩春ころから病んで瘦せ細り、医者に見せても治らなかつた。蕭は道士の言葉を思い出し見てもらつたところ「妻の媚娘は年を経た狐精」だと言われた。道士が檄を書いて与えると、にわかにかが黒くなり、雨が降りだした。媚娘はその時、雷にあつて死んでしまつたが、それは人間の髑髏を被つた狐であつた。道士は死んだ狐を焼き、静かな所へ埋葬して供養してやり、二度とこのようないふことが起きないようにした。その後、蕭の病氣は治り、黄は金持ちになり、道士の術に人々は感心したという。(要約)

中国では、このように狐と道士が結び付いた話がよく見られる。

「五斗米道」とは、後漢の張陵(張天師とも呼ばれる)のたてた道教で、張陵に従つて道を受ける者は謝礼として、米五斗を納めたのでこの名が付いたと言われる。この張天師にまつわる話に狐が関係している。《諸神由来》⁽⁴⁶⁾によると、

西華山に五百年の修行を経た一匹の九尾狐がいた。この九尾狐は丹を作り、それを口の中に入れると人間に変化(へんげ)することができた。ある日、九尾狐は狼に襲われ木の上に避難した。そこへ道士が通り掛かつたので美女に化け、頼み込んで助けてもらった。九尾狐は土下座して礼を言つたが、道士がよく見るとそれは「狐精」だつ

た。怒った道士は、口で呪文を唱えながら剣（つるぎ）で九尾狐を殺そうとした。九尾狐は必死になって許しを乞うが、天師はそれでも殺そうとした。九尾狐は天師に「あなたは天師になったばかりで、符を頼みに来る人は多くない。私は自分の修行は後回しにして、あなたのために道教の偉業を成し遂げる。」と言ったので、天師は喜んで手を組むことにした。九尾狐はそれから人間社会へ行って攪乱させ、「天師の符があれば、災いは消える」と言い触らした。ある日、九尾狐は村へ行って、勤労青年の周小伍に憑いて病気にさせた。小伍の父は町で天師の噂を聞いて、張天師の符を貰いに来た。その夜から九尾狐は小伍に憑くのを止めたので、次の日には小伍の病はすっかり癒えた。このようにして九尾狐は若者に次々と憑き、その家のものが天師の符を貰いに来ると、忽ちのうちに病が癒えるので、この噂は噂を呼び、人々はみんな天師の符を貰いに来るようになった。ある日、張天師は孔子廟村の金持ちが宴会を開くというのを聞き付け、一計を案じた。九尾狐は宴会場に出掛けて行き、大きな咳払いと共に天井から痰を落とし、続けて石灰をばらまいた。室の中の灯籠も消え、大騒ぎとなったが、室の梁の上で青い顔の牙をむき出した怪物が笑っているの、肝っ玉の小さな者は怖がり、肝っ玉の大きな者は、門から飛び出そうとした所へ石が落ちて来て、出るに出不らぬ。騒然としている所へ天師がやって来て、「符」を書いて室の正面に貼った途端、室は平安を取り戻した。居合わせた人々は天師の偉業を称え、それ以後、張天師の所の線香の火は絶えず、道教に入信したい者、病気を治してもらいたい者で一杯であった。(要約)

ここに述べた以外にも、道士が符で狐憑きを退治する話は、唐・張讀《宣室志》⁴⁷⁾の《三狐争治病》や清・蒲松齡《聊齋志異》⁴⁸⁾の《胡四姐》など多数見られるが、なぜ道教と狐が結び付いたのであるか。

道教は修練や鍊丹によって、仙人になるのを強調する。その一方で、張天師のように符を書き、人々の無病息災を唱えて、神や仙人がこの世に存在することを訴えるには、その威力を發揮させるためどうしても妖怪を登場させる必

要が出てくる。そのため道教では色々な神を作り上げ、それと同時に幽霊や妖精を退治する「鍾馗」さまのような鬼退治の神も作り上げた。そこにおいて狐精を登場させるのは、道教の宣伝に好都合であったと思われる、物語の作者がそれを描いたのは自然の成り行きであったと思われる。

明・馮夢龍《古今談概》⁴⁹の〈狐假子路〉は、

東昌県の孔子廟は、孔子と彼の七十二人の弟子の木の像が奉られていた。ある日、子路の像が突然「私は子路で、孔子様がわたしを遣わしこの地の災いと幸せを主宰させた。」と話出した。人々は争って彼を祭り、供え物ををした。ところがいつも供えた物がなくなり、一人の役人がこれを聞いて言うには、「これは狐精の祟りだ。多くの酒を供えるのだ。」しばらくすると、酔っぱらった狐がそこで寝ていた。これを見て役人は笑いながらこう言った。「私はおまえが子路を学びたいのだと思っていたが、昼間から居眠りをする宰予の真似をしたかったとはなあ。」

(要約)

(8)

《山海経》《白虎通義》《呉越春秋》などで瑞祥とされていた九尾狐が、明・作者未詳《封神演義》⁵⁰では極悪な獣として、面白おかしく描かれている。

冀州候蘇護の女(むすめ)に乗り移った九尾狐が、紂王の妃に迎えられ妲己となり寵愛を集める。彼女の言葉によって紂王は炮烙の刑などで、善良な多くの臣下たちを殺す。やがて反乱を起こした周の武王が殷の都に攻め込んだ際に、妲己は姜子牙によって斬首された。(要約)

これに言及した文書が日本にあり、『燕石雜誌』⁽⁵¹⁾に

唐山演義の書に、九尾の老狐化して姐妃マメとなり、紂王を蟲惑せしよしを作りしかば、ここにも好事のものありて、近衛帝の宮嬪玉藻前といふ狐妖を作り出せしは、謡曲の滑稽なるが、何人か序あやしう綴りなして、三國傳來の怪談なりぬ……九尾の狐といへば、姐妃玉藻が事也と振子も合點せり(以下略)

とあり、中国での小説の姐己が日本へ渡り、玉藻前になったというのである。

「玉藻前」は、天竺、中国で淫酒によって王を蕩し、残虐非道の限りを尽くし日本に渡来した「金毛九尾の狐」の化身で、玉藻前説話を記した話はかなり数のにのぼり『玉藻』『玉藻の草子』『玉藻の前物語』とも呼ばれる。『玉藻の草子』⁽⁵²⁾では、

鳥羽院の御所に化性前という遊女が現れ、たちまち鳥羽院の寵愛を一身に集めることになった。化性前は天下に並びなき美女であるばかりでなく、四書五経などに通じた才女でもあった。身体から光を放つので、名を「玉藻前」と改められた。院は玉藻前と夫婦の契りを結ぶと、やがて病気になるってしまった。陰陽頭の阿部泰成に占わせると、玉藻前は下野国那須野に棲む八百歳を経た尾の二つある大狐で、院の病は化女玉藻前の仕業だという。泰成の進言を受け入れ祈禱すると、突然玉藻前は消え失せ、ほどなくして院の病は平癒した。那須野に逃げ戻った妖狐の退治が命じられ、東国の武将上総介と三浦介が苦勞の末に狐を射殺した。(要約)

美女に化して院の命を狙った玉藻の話は、中国の小説にある姐己になって紂王を虜にした九尾狐の話の影響を受け、それに妖怪の正体を占うことができ、しかもそれを祈禱する陰陽師の呪術が物語を引導する形になっており、陰陽道が話の軸にあると言える。

(9)

中国における狐精文学の最盛期は清朝で、小説の中の狐は人間の友達に成り始め、相互に利用し合うような功利主義的ではなく、相互理解の上に立った信頼関係が見られる。

清・紀昀の《閱微草堂筆記》⁽⁵³⁾・卷十二には、

柳という男は狐と交際し、とても仲がよかった。柳は貧乏だったので、狐がその生活の面倒を見てやっていた。ある時、富豪に金を借り、借金のかたに女房を質に入れたことがあったが、狐が柳の証文を盗んでやったので事件が落ち着いたこともあった。ある時、金持ちの娘が狐に憑かれ、符でも追い払うことができなかったので、狐退治をしたものには百両の賞金を出すという募集があった。柳の妻は金に目がくらみ、夫に狐を殺すようけしかけた。柳は始め友達を裏切ることはしたくないと渋っていたが、ついには仕方無く実行に移そうと狐を待っていた。しかし狐はすべてを知っていて来なかった。ある日、柳が近所の者数人と一緒にいる所へ狐が来て、これまでの互いの友情の深さ、これまでいろいろと援助してきたこと、そして柳の悪計を洗いざらい話したあとで、柳の娘の掛け布団を作ってやると約束したからと言って、布一匹と線一束を置き、「友人を選ばなかったのは、私の過失だった……」と去って行った。柳はそこにいた人々から責められ、村にも居られなくなり、家族で夜逃げしたという。(要約)

これは狐の友情を裏切った人間の男の話であるが、最後に狐が人間社会の陰悪さを嘆きながら去って行ったところに作者の言いたかった主旨があると思われる。作者は狐の行為と言葉を借りて、人間の強欲さ、裏切りなどを批判

しているのである。印象的なのは、狐は人から裏切られても最後の最後まで約束をたがえることなく、自分の責任を果たしている点である。

《同書》巻五は、

聶松巖は、狐の友人がいる。宴会の度に彼を招いて、人間と同じように扱って、食べたり、飲んだり、語ったりした。ただ狐は姿を現さず、声だけであったので、聶は「対面もできないのに、どうして交わることができようか」と狐との対面を求めた。ところが狐はこう言った。「交わるのは心と心であり、姿や顔をもって交わるのではない。およそ人の心というものは測り難いものだ。山川のように陰悪で、平気で他を陥れる。人間は心で交わろうとしないで、姿の交わりを求め、姿が見えないからと言って冷淡にする。これは異常ではないか。」(要約)

これらの物語は狐と人間の付き合いを通して、貴いのは心であることを意識させており、ここに描かれた狐は世間の深い所までよく見抜いており、狐ではあるが人間のものであって、人間の善美な品格を持ち合わせている点、かえって人間の方が狐に及ばないようである。

清・呉沃堯《我佛山人短編小説集》の〈狐医〉は、

張曉瀛は喘息を患い、二十年間に百人余りの医者に診て貰い、あらゆる薬を飲んだが一向に良くならない。ある日、いつものように発作が起き、もうだめだというので家の者は葬式の準備をした。ところが持ち直し、ある日起きると枕元に一粒の赤い丸薬が置いてあった。その薬は続けて三日間置いてあった。張がこの薬を飲んだら、病気はすっかり良くなってしまった。しばらくすると四十歳くらいの美しい女が来て、自分の名は胡で狐だとう。丸薬を置いたのはこの狐で、張が狐を仏壇に祭ると、近所の人が病気を治しに大勢頼みに来た。しかし狐は、病気になるのは悪い事をしたからで、悪い事をしなければ病気にはならない、と言って断ってしまうことがある。

断られた人は、世の中にはやぶ医者や沢山いて大勢の人を殺している。それならなぜあれらの医者達は、病気にならないのか、と狐に聞くと、狐曰く「やぶ医者は天から派遣された星で、世間のためにならない偽善者を退治しているのです」。(要約)

これは題名にあるように、狐が人を治療するという話で、医療に名を借りた人間精神の改善を意識させている。

日本でのその後の狐物語は、例えば、『東遊記』⁽⁵⁵⁾に、

百姓夫婦がねずみを退治しようと毒の入った餌を仕掛けた。それを食べたねずみは死に、その死んだねずみを狐の子が食べてしまい、死んでしまった。親狐はこれを恨んで、百姓夫婦の娘二人に憑いて三人とも死なせてしまった。百姓夫婦も巡礼の旅に出た。(要約)

『窓のすさみ追加』⁽⁵⁶⁾には、狐の生き肝を薬にするために、狐狩りをする話、『閑田耕筆』⁽⁵⁷⁾巻之三には、寺に住む狐が火災から寺を守ったり、住職が外出する時には護衛をしたりする話、また『新著聞集』⁽⁵⁸⁾には、未熟な狐が化け損じた話しが収められている。

これらのように日本では、人間と狐が真の恋愛をする話しや友人になる話、人と狐の対等な付き合いにまでは発展せず、相変わらず以前見られた、狐女房譚、報復譚、化け損じなどの話に止まっていて、そこから一步踏み出した新しい話は見られない。

清・蒲松齡の《聊齋志異》は、清代における狐精物語の人間変身芸術の最高潮を代表する文学の高峰である。ここに描かれる狐は人情に富み、やさしくて親しみが持てる。最初《聊齋志異》の初校は《鬼狐傳》と名付けられたとい⁽⁵⁹⁾うだけあって、四四五篇の怪異譚の中、人異一六六、鬼異八十、物異七十六について、狐異は六十三も収められてい

る。

〈嬰寧〉

王子服は、散歩中美しい娘に出会い、じっと見つめたら逆に「泥棒のような目」と言われ、がっかりして病気になるってしまった。ある日、王はまた散歩に出掛けてその娘に再会することができ、娘を家に連れて帰った。娘は嬰寧といい、嬰寧の父が狐に憑かれ、その狐が生んだのが嬰寧であった。二人は結婚したが、彼女は異常によく笑う。その笑いのため、隣の息子が死んでしまい、それ以後、嬰寧は笑わなくなった。ある日、嬰寧は夫に、自分は狐の生んだ子で、母が死ぬとき幽鬼の母に託して行ったので、十数年世話になり、今の自分がある。どうか幽鬼の母を弔ってくれと頼んだ。王はそれを聞いて、夫婦二人して毎年墓参りをした。その後、夫婦に子が生まれたが、その子は母にそっくりだったという。

(要約)

〈酒友〉

車という名の男は酒好きで、貧乏なのにいつも酒を枕元に置いて飲んでいた。ある日、自分の横に狐が酔っぱらって犬のように寝ていて、そばに置いてあったとっくりが空になっていた。車は自分の酒飲み仲間だと、丁寧に扱ってやった。次の日、狐は立派な男に変身しており、車と飲み仲間になった。狐は車に富を与え、車の妻を姉さんと呼び、子供もかわいがっていたが、車が死ぬと来なくなってしまった。(要約)

〈周二〉

張大華は金持ちの役人だった。家に狐がいてうるさいので、あの手この手で追い出そうとしたが、一向に利き目がない。村の東方に一匹狼ならぬ一匹狐がいて、人々は「胡二爺」と呼んでいた。張は「胡二爺」のことを聞い

て、家の狐退治を頼んだ。彼が言うには「私には力添えができないので、友人の周三に頼むといい」と、彼を紹介した。それから狐の周三は張の家に来て狐を退治し、それから彼は張の家に主人と客のように住んだと言う。

(要約)

〈蓮香〉

秀才の桑曉は、小さい頃孤児になった。彼は生まれつき一人静かなのが好きだった。ある日突然、蓮香という美しい女が尋ねて来た。それから四五日に一度来るようになった。ある日のこと、十五歳くらいの女がすっと入って来た。娘は李と言い、帰る時、自分の靴を置いていった。桑がそれを出して遊ぶと女はすっと来た。李は「すけべ狐の蓮香と手を切らないと私は来ない」といい、蓮香は「また李と会って死にたいの?」と言う。李は幽霊で、蓮香は狐だったのである。しばらくすると、桑は病んで死んでしまった。李と蓮香は桑を生き返らせるため、二人で協力した。蓮香は病みあがりの桑の看病をし、李は蓮香に仕え手助けして、時々桑の顔を見に来た。李は実は章家の燕児という娘で死んでしまったのだが、李の体を借りて生き返ったのだった。李と桑は結婚し、蓮香も一緒に暮らした。その後、蓮香は子供を生み、死んでしまったが、死んだ姿は狐だった。家は富栄えたが、李には子供ができなかった。妾をもらおうとしていたところへ蓮香にうり二つの娘が来た。それは蓮香が死に際に李に「十五年経ったら会いに来る」と約束した通りに会いに来たのであった。そして桑は李の前身の燕児の墓から骨を取り出し、蓮香と合葬してやった。(要約)

これらの作品に描かれた世界は、世俗の門弟財勢の観念がなく、封建礼教の束縛を受けず、人間の幸福に憧れ、大胆に愛情を追求し、また強暴な迫害に反抗し、恋人と生死を共にしているのもある。

狐と幽霊が一人の人間の男を愛しながらあつい友情で結ばれた〈蓮香〉の世界、ここに描かれたような純粋な愛や、

熱烈な愛、真剣な愛、これらは封建社会では現実に見ることのできないものである。封建的礼教、封建的婚姻関係の束縛の下での自由恋愛の禁止、婚姻の不自由、個人欲の抑圧などの不満を狐の変化（へんげ）の世界に仮託して、現実の理想、願望を表現していると言えよう。

(10)

狐の芸術的世界は、現実との対立する一面がある反面、従属する一面もあり、これはまさに人間社会の縮図とも言える構造を成している。

日本では、かつて狐が田の神の使いと考えられ、田畑の近くに塚を築いて祀ったのが狐塚で、後にこうした祭場に稲荷の小祠を勧進したために稲荷信仰が全国に広まったと言われている。それは狐の黄色が土の色であるところから、穀物神と結びつけられ、稲荷神の使いとなり、またその予知能力が呪い畏怖の対象となって、どこの稲荷社でも一對の石狐が陳座、祠に祭られているが、いずれにしても、日本の狐は稲の害敵である野鼠を捕食することで、穀物（稲）と深い関係にあり、穀物の豊作に寄与するということが、人間社会に密着しているのである。狐は人を誑かすもの、憑くものとされ、人間に化ける最初の妖狐は『日本霊異記』に見える。

狐は日本でも中国でも化けるものとされているが、中国の狐には違った特色がある。まず化けるための神通力を持つためには、人間の道士や僧が修行を積むのと同じように、修行をしなければならぬ。何百年という修行を重ねると神通力は大きくなり、狐にとっては最高の「天狐」になれる。神通力を増すためには、精気を蓄積しなければならず、そのため狐は女に化け、人間の男から精気を吸い取る。狐と契った男は、精気が枯渇して死んでしまう。ところ

が狐が人間に与えるのは危害ばかりでなく、人間に幸福、富をもたらす事もある。平和的に共存するものとして対処する時、狐は人間の得難い良友となり援助者と成り得るのである。

日本の狐精物語では、狐はその正体を必ず自分の分身ともいえる子供に見付けられる。そして狐だど分かるとその子を残して、例外なく人間社会から姿を消す。これは狐の生態の中でも特徴的な子別れの儀式が日本人に感動を与え、信太妻などの物語が生まれたのであろうが、日本の場合は決まって、狐であることを最後には暴露する。

中国の場合は、初めから狐と分かっている友達になったり、恋愛をしたり、結婚したりする。また狐であることが途中で分かった場合でも、それでどうこうなることなどなく、狐は正体がバレたからといって去って行かないし、人間の方も狐だからといって避けることもしない。ある狐は最初から正体を告げて人間の前に現れて、人間と付き合う。例えば、《聊斎志異》の中の《嫦娥》では、人間の主人公美が、嫦娥という仙女を正妻とし、顛当という妖狐を妾として、長寿を全うし幸せに暮らした、とあるように、狐が人間に変身して人間と愛し合い、結婚して幸せな生活を送るといような話は多く見られるところである。

日本では、狐はあくまで狐であって、人間と一線を画し、狐であることが分かると去っていく運命にある。中国では、人間は狐を同類と見做し共存している。だから物語の中の狐は、狐であってもそれを意識させることがないばかりでなく、人間そっくりそのままの姿と心を持ち、その上、現実の人間以上のこまやかな感情、誠実さをもって人間社会に溶け込んでいるのである。

中国における狐は、上古では瑞祥のシンボルであった。「万物に霊がある」という宗教思想と密接な関係があって、早期の志怪小説は「神道はいつわりなし」というのを強調するためのものであった。唐代あたりから「狐の化け物がいなければ村に成らない」という諺のように、民間では神として祭られ、狐の神格化が見られるようになった。唐人

は、狐精物語を小説のためと考えるようになり、狐精物語の宗教的意識は弱まりはしたが、やはり当時の民間信仰や森羅万象のすべてが五気の相生・相克の循環の理によって生成されるという根本原理を持つ陰陽五行説などは作品の深層にあることは否めない。しかし、唐代の狐精物語はそれまでの拜物思想を追放し、神秘文学の形式を残して読者を引き付け、狐精文学としての楽しみを十分發揮している。

日本は中国の思想文物を取り入れ続けて来た。狐も例外ではなく、中国の妖狐を移入し、日本の情緒のある狐に变身させている。例えば、『今昔物語』での「為救野干死写法花人語第五」では、狐は男に誘われるのだが、交わると自分が死ぬと訴える。しかしそれに耳を貸さない男の強引さに仕方なく交わり、男の身代わりになって死んでしまった。男は狐の遺言通りに写経すると、狐はみ仏の護加護によって成仏する、というように仏教説話を折り込んでいる。これらのように日本では仏教と結び付けられたのが多く見られるが、中国では前述のように道教または儒教の影響が強く表れている。

中国の狐精物語は、概念的、浪漫的、高唐無稽であり、詼諧玩世の精神に富んでいるのに対して、日本のは情趣的、現実的であり、因果応報などの仏教的思想が背景にあって、物語を作り上げている。

物語の中で、人間と結婚する獣は狐だけではないが、なぜか狐がその代表とされている。それは狐の切れ長の目もと、華奢な姿などが美人を連想させるのであろうか、物語に登場する狐は女であれば絶世の美女であるし、男であれば立派な風体をしている。いずれにしても容姿端麗で高雅なのである。このような容貌、神秘的な能力の所有者としての性格と、逆にずる賢くて、敏捷で、人を誑かす淫獣としての性格をもって、物語の中では多種多様に描かれ、読者を魅了している。

他の国々でも狐を扱った物語が多数登場するが、中世ヨーロッパで広く読まれた動植物の寓意譚集『ベステイアリ』

のように狐は狡知なものとして位置付けられている。筆者は、ロシア人、ドイツ人、イギリス人、スペイン人にそれぞれ自国での狐に対するイメージを尋ねてみたが、狐に対するイメージはすべて悪で、賢くて狡猾であった。ドイツ語では「あの人は狐」と言えば「嘘つき」を意味し、スペイン語で「あの人は狐」と言えば「ずるい人、抜け目のない人」を意味するそうである。これらヨーロッパでの狐のイメージは、どうも『イソップ物語』の影響からだと思われるが、狐が鶏を襲ったり、頭がよいのを利用して悪事を働くのが多い。

しかし、中国や日本のように人に化けて人間と結婚して子供を生んだり、人のために働いたりなどのような狐精物語は見られない。このような狐精現象は、中国と日本に共通する崇尚奇異の心理的表現形式であり、日中両民族の古き文化が組成した形象と言えよう。

注

- (1) 全訳漢文大系 市原亨吉ら著 集英社 昭和五十一年六月
- (2) 《山海経校譯》 袁珂校譯 上海古籍出版社 一九八五年九月
- (3) 《百子全書》所収 浙江人民出版社 一八八四年五月
- (4) 《呂氏春秋集釋》 楊家駱主編 世界書局 中華民國六十四年三月
- (5) 《四部叢刊》所収 上海商務印書館縮印明刊本
- (6) 《辞海》 辞海編輯委員会編 上海辞書出版社 一九八九年九月
- (7) 《説文解字注》 [漢] 許慎撰 [清] 段玉裁注 上海古籍出版社 一九八六年六月
- (8) 『説文新義』卷十 白川静著 五典書院 昭和四十六年十二月
- (9) 『狐』陰陽五行と稲荷信仰 吉野裕子 法政大学出版社 一九八十年六月
- (10) 《漢語大字典》漢語大字典編輯委員会 四川辞書出版社 湖北辞書出版社 一九八七年
- (11) 注(9)に同じ

- (12) 《中国史籍精華譯叢》所収 山東大学出版社ら出版 一九九三年八月
- (13) 《四部叢刊》所収 上海商務印書館縮印明刊本
- (14) 《四部叢刊》所収 上海商務印書館縮印明刊本
- (15) 《說郭三種》所収 明・陶宗儀ら編 上海古籍出版社 一九八八年十月
- (16) 注(6)に同じ
- (17) 《抱朴子》 晋・葛洪撰 上海古籍出版社 一九九十年十月
- (18) 《搜神記全譯》 晋・干宝原著 黄濛明訳注 貴州人民出版社 一九九二年四月
- (19) 《四部叢刊》所収 上海商務印書館縮印明刊本
- (20) 《說郭三種》所収 明・陶宗儀ら編 上海古籍出版社 一九八八年十月
- (21) 《叢書集成初編》所収 中華書局 一九八五年
- (22) 《史記注譯》 王利器主編 三秦出版社 一九八八年十一月
- (23) 《太平廣記》 宋・李昉ら編 文史哲出版社 中華民國六十七年十一月
- (24) 《中国小説史略》 魯迅著 北新書局 一九二五年九月
- (25) 《中国古典文学全集》第六卷所収 前野直彬訳 平凡社 昭和三十四年九月
- (26) 東洋文庫十六『唐代伝奇集(2)』所収 平凡社 昭和三十九年四月
- (27) 《太平広記》卷四五二所収
- (28) 『生活文化歳事史第Ⅱ卷』 半譯敏郎著 東京書籍 一九九十年十月
- (29) 『万葉集』 日本古典文学全集五 小島憲之ら校注・訳 小学館 一九九二年十月
- (30) 東洋文庫四五七『続日本紀』 平凡社 一九八六年六月
- (31) 『日本靈異記』 古典日本文学全集一 石川淳ら訳 筑摩書房 昭和三十五年三月
- (32) 『新訂増補国史大系第二十六卷』所収 吉川弘文館 昭和四十年三月
- (33) 『諸本集成倭名類聚抄』 本分篇 京都大学文学部
国語学国文学研究室 臨川書店 昭和五十六年五月
- (34) 『今昔物語』 日本古典文学全集二十一・二十三・二十四 馬淵和夫ら校注・訳 小学館 昭和六十二年八月・一九八九年四

月・昭和六十二年八月

- (35) 『宇治拾遺物語』 日本古典文学全集二十八 小林智昭校注・訳 小学館 一九九〇年九月
- (36) 『古今著聞集下』 新潮日本古典集成(第七六回) 西尾光一ら校注 新潮社 昭和六十一年十二月
- (37) 『曾我物語』 日本古典文学大系八八 校注者市古貞次ら 岩波書店 一九八三年四月
- (38) 東洋文庫三九五『本朝食鑑五』 人見必大著 島田勇雄訳 平凡社 一九八一年三月
- (39) 東洋文庫二四三『説経節』 荒木敏ら編注 平凡社 昭和四十八年十一月
- (40) 『定本柳田国男集』 卷二十六所収 筑摩書房 昭和三十九年七月
- (41) 東洋文庫四六六『和漢三才図会』 平凡社 一九八七年三月
- (42) 『四部叢刊』 所収 上海商務印書館縮印明館本
- (43) 『国狐精故事大観』 所収 王毅ら編輯 華中理工大学出版社 一九九三年八月
- (44) 注(43) に同じ
- (45) 『中国古典文学全集』 二十所収 飯塚朗ら訳 平凡社 昭和三十三年四月
- (46) 『諸神由来』 程曼超著 河南人民出版社 一九八三年十二月
- (47) 『説郭三種』 所収 明・陶宗儀ら編 上海古籍出版社 一九八八年十月
- (48) 『定本聊齋志異』 柴田天馬訳 修道社 昭和四十三年二月
- (49) 『馮夢龍全集』 六所収 馮夢龍編撰 江蘇古籍出版社 一九九三年四月
- (50) 『封神演義』 許仲琳著 春風文艺出版社 一九九四年六月
- (51) 『日本随筆全集 第五卷』 所収 国民図書 昭和三年二月
- (52) 『日本妖怪異聞録』 所収 小松和彦著 小学館 一九九二年五月
- (53) 『閩微草堂筆記』 清・紀昀著 天津古籍出版社 一九九四年九月
- (54) 注(43) に同じ
- (55) 『日本紀行文集成』 第二卷所収 日本図書センター 昭和五十四年十月
- (56) 『有朋堂文庫七十』 所収 有朋堂書店 大正七年八月

- (57) 『有朋堂文庫八四』所収 有朋堂書店 大正七年十月
- (58) 『日本隨筆大成第二期』所収 日本隨筆大成編輯部 日本隨筆大成刊行會 昭和三年四月
- (59) 注(48)に同じ